広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「論理」を切り口とした国語科カリキュラムの開発
Author(s)	国語科研究部,
Citation	研究紀要 ／ 広島大学附属小学校 , 52 : 9 - 10
Issue Date	2024-07-30
DOI	
Self DOI	10.15027/55602
URL	https://doi.org/10.15027/55602
Right	
Relation	

広島大学附属小学校『研究紀要』第５２号　2024

「論理」を切り口とした国語科カリキュラムの開発

国語科研究部

１　はじめに

本校国語科研究部では,〈他者〉を楽しみ続ける児童を育成するために，これまで「論理」を切り口とした国語科実践の提案を行ってきた。さらに，この「論理」を「主体の論理」と「対象の論理」に細分化することを通して，授業を構想する手がかりにしたり児童の思考の表出を見とったりすることを試み,実践を重ねてきた。「対象の論理」とはテクストに内在する論理であり,「主体の論理」とは学習者の思考における論理のことを指している。

まず，授業を構想する段階では，教師が筆者の論理構成を分析することで，筆者の論理を授業の中で扱うことができる。これにより，児童のテクストへの理解を深めることができると考えられる。

また，授業中や授業後には，児童の思考を分析する観点にもなる。「対象の論理」と「主体の論理」という観点を用いて児童の思考を整理することにより，児童同士の意見の交流を活発化させ，様々な意見を表出させることができる。

このような考えのもと，本校国語科研究部では「論理」を切り口とした国語科実践を蓄積してきた。「論理」を切り口とすることで，本校の研究テーマである〈他者〉を楽しみ続ける児童を育成することにもつながると考えている。異質な対象である〈他者〉の思考を「論理」として捉えなおすことにより，表出された思考だけでなく,〈他者〉そのものの背景にも迫ることができると考える。

２　「論理」を切り口とした国語科実践の系統性の検討

これまで,「論理」を切り口とした実践を行ってきたことを踏まえ,「論理」を授業で扱うことで身に付けられる能力の系統性を検討する。各学年の目標に照らし合わせながら,実践を整理することで,児童の学びの履歴を繰り返し検討することができる。

まず，系統性を検討するために,「論理」を切り口とすることで達成される学びの目標を整理した。低学年では「生活経験との結びつき」,中学年では「他者の視点の獲得」,高学年では「メタ的視点の獲得」を目標として設定した。これらの目標を達成するために，授業内の読みとして低学年では「『自分』の視点で読む」，中学年では「『複数の視点』で読む，高学年では「俯瞰する（語り手）の視点で読む」を設定した。

これらの系統性は，自己が認識する世界を自己中心的なものから次第に他者や社会へと拡張していくことを想定している。また，児童の発達段階を踏まえ，認識がより外の世界に向いていくことを踏まえ，教材分析の観点として用いている。特に高学年の教材では，語り手の視点を読んだりやテクストの内容を高次の次元から解釈したりすることが求められることから，自己の世界から離れる視点を持つことが求められる。

３　「論理」を切り口とした国語科カリキュラムの提案

以上の研究を踏まえ，「論理」を切り口とした国語科実践のカリキュラムを開発することを目指した。先に示した系統性を踏まえてカリキュラムを開発することで，国語科で求められる資質・能力の育成に寄与することができると考える。カリキュラムの試案を以下のように示す**【表１】**。

【表１　「論理」を切り口とした国語科「読むこと」のカリキュラム（試案）】

<table>
<tr><th>学年</th><th>説明的文章</th><th>文学的文章</th><th>目標</th><th>授業内の読み</th><th>文種を貫く視点としての「論理」</th></tr>
<tr><td>1</td><td>どうぶつのあかちゃん
こどもをまもるどうぶつのちえ</td><td>たぬきの糸車
スイミー</td><td rowspan="2">生活経験との結びつき</td><td rowspan="2">「自分の視点」で読む</td><td rowspan="2">単数（主人公）の「論理」</td></tr>
<tr><td>2</td><td>あなのやくわり</td><td>ニャーゴ</td></tr>
<tr><td>3</td><td>ねこのひげ</td><td>モチモチの木</td><td rowspan="2">他者の視点の獲得</td><td rowspan="2">「複数の視点」で読む</td><td rowspan="2">複数の「論理」</td></tr>
<tr><td>4</td><td>点字を通して考える
数え方を生み出そう</td><td>ごんぎつね</td></tr>
<tr><td>5</td><td>「弱いロボット」だからできること
固有種が教えてくれること</td><td>注文の多い料理店
たずねびと</td><td rowspan="2">メタ的視点の獲得</td><td rowspan="2">「俯瞰する（語り手）の視点」で読む</td><td rowspan="2">筆者・語り手の「論理」</td></tr>
<tr><td>6</td><td>「鳥獣戯画」を読む</td><td>海の命</td><td>筆者・語り手と自分，それを取り巻く世界の「論理」</td></tr>
</table>

ここでは，国語科の学習の中でも「読むこと」の学習に限定されており，他領域の学習事項について触れることができなかった。他領域への援用可能性については，特に「話すこと・聞くこと」のような相手意識を持つことが求められる学習での効果も期待できると考えている。話し合い活動などのような場が設定された際に，議論の内容を俯瞰したり，客観的に整理したりすることが「論理」を観点に実践を構想することできるようになると考えられる。一方，「対象の論理」や「主体の論理」といった，本校の研究から見出された視点について，「読むこと」の学習以外に援用する際には，その定義やとらえ方を精査する必要があると考える。今後，「論理」を切り口とすることの可能性を検討し，実践および研究を重ねていきたい。　　（文責　丸田健太郎）